



南阿蘇ビジターセンター 阿蘇野草園だより



●ホオジロ

野草園でシジュウガラの上に、よく見られる代表的な留鳥です。文字どおり、頬の黒色に白のワンポイントがあることから、頬白と名付けられました。ちなみに頬が赤い頬赤という鳥もいます。ほぼスズメと同じ大きさで、一年間通して、林間、牧草地等で鳴き声を聞くことができます。

鳴き声はきれいで、いろんな風に聞こえることでも知られています。「一筆啓上仕り候」が、昔から代表的な鳴き声例で、他にも「源平つつじ白つつじ」、おもしろい例として「札幌ラーメン味噌ラーメン」や「ちんちろ弁慶皿持って来い」とも聞こえるそうです。

姿を見かけ、鳴き声を聞いてどのように聞こえるのか、観察するのもおもしろいですよ。



【写真提供】増田 泰夫さん(阿蘇地区パークボランティア)

問 南阿蘇ビジターセンター ☎0967-62-0911

人にやさしいまちの実現に向けて ～互いの人権を尊重し、支え合うことから～



◆「終戦から80年」が意味するもの

8月に入り、今年もまた15日の終戦記念日を迎えます。特に今回は、戦後80年の節目の年でもあります。つまり、70歳代までの方々は、誰もがあの太平洋戦争を経験していない世代となったわけです。しかし逆に言えば、祖父母や親から、これまでいろいろな機会に戦争の悲惨さを伝え聞いてこられた世代であるとも言えます。

私も子どもの頃、夏になるとよく祖母や母親から戦争の話が聞かされていました。「空襲の時に敵機が飛来して、機関銃でダダダダーッと地上の人ばなぎ倒すように機銃掃射してきた時は、たいぎゃあ怖かったばい。」と語る祖母の体験談には、さすがに身が引き締まるほどの恐怖感を感じたことを覚えています。また、母から聞いた話では、戦争が激しくなると食料が不足していたため、運動場をみんなで耕し、からいも(サツマイモ)を作っていたこと、女学校時代、下関市へ連れて行かれ、軍需工場みんなで働いていたことなどの内容が特に印象に残っています。当時の私はそれほど深く受け止めることなく、子ども心に「勉強せんでいいから、よかろう」と思ったことさえありました。しかし大人



になって考えてみると、母は、激戦が続く太平洋戦争の末期に、労働力不足を補うための「学徒勤労動員」と称して生産現場の第一線に立たされ、その中で、お国の勝利を信じてやりたいことを我慢しながら青春時代を送っていたことを理解できました。

◆ 戦争の記憶を風化させないために

戦争を体験した方々の想いはとても貴重である反面、苦しく悲しい記憶の積み重ねでもあります。多くの人が亡くなり、言葉では言い尽くせない悲惨さを体験されています。もし、体験談を語っていただける方が近くにおられるとしたら、戦争を知らない私たちの世代は、その方たちにしっかり寄り添い、その想いを正面から受け止めていくことが大切でしょう。そして、貴重な生の証言から得られた惨禍の記憶を受け継ぎ、更に「戦争を知らない」次の世代にバトンを渡していくことが求められます。

戦争は、最大の人権侵害であり、ひとたび戦争が起きれば、これを終わらせるのは容易ではありません。私たちは、改めて不戦の誓いをもち、二度と戦争を起こさない決意を共有し、争いのない平和な社会を築いていくことを目指していきたいものです。

問 教育委員会 地域人権教育指導員
☎0967-62-0227